

ほんばこ



愛媛県立今治西高等学校図書委員会 2021

初夏を感じる季節かと思っただのも束の間、今年にはやくも梅雨入りしましたね。雨ニモマケズ風ニモマケズ、宮沢賢治のようにとまではいきませんが、強く生きていきたいと思います。

みなづき かぜまちづき あおいづき
6月(水無月・風待月・葵月)

※二十四節気※

ぼうしゅ
芒種 5日

稲や麦など穂の出る植物の種を蒔く頃です。稲の穂先にある針のような突起を芒のぎといいます。

げし
夏至 21日

一年で最も日が長く、夜が短い日です。これから夏の盛りへと、暑さが日に日に増していきます。

小論文に役立つ本

小論文を書くときの参考にコーナーを設けています。ZESTで利用する人もいます。3年生だけでなく、1・2年生も、普段から興味のあるテーマについて読んでみることをお勧めします。なお、**禁帯出**になっている本は、図書室内での使用になります。協力をお願いします。

◎『現代用語の基礎知識 2021』（自由国民社）

現代社会を読み解くキーワードについて解説されているので、最新の情報・知識を得るのに便利です。ある分野についてまとめた知識を持つのに役立ちます。また、年度版で出されており、事柄によっては過去の版の方が詳しい場合があります。

◎『2021年の論点 100』（文藝春秋）

この年度に問題になった事柄について、分野ごとに識者が論じた文章が掲げられています。断片的な知識を得るのではなく、自分の論を形成するために、また、論文の書き方を学ぶために適しています。

『わたしを離さないで (Never Let Me Go)』 カズオ・イシグロ 著 早川書房

私が紹介する本は、カズオ・イシグロの「わたしを離さないで (Never Let Me Go)」です。もし、最初から人生が決まっていたなら、あなたならどう生きますか？人間とはなにか、考えさせられます。この本のワンフレーズに、「わからん」というものがあります。私達はまだ未熟で知らないことがたくさんあります。知らないほうがよかったこともあるかもしれません。しかし、現実を知るからこそ見えてくるものもあるのではないのでしょうか。

(本文中から一部抜粋) (3年生男子)

* 図書委員会読書会：令和3年7月15日（木）放課後 本校図書館にて
大江健三郎『ヒロシマ・ノート』から「広島へのさまざまな旅」（岩波新書）

* (本の紹介) バルザック『浮かれ女盛衰記 第四部 ヴォートラン最後の変身』集英社文庫 田中未来・訳
Honoré de Balzac "Splendeurs et misères des courtisanes" 1838~47

1 オノレ・ド・バルザック 1799~1850：フランスの作家。トゥール市生まれ。パリ大学法学部に学び、見習い書記の仕事などをする。創作の傍ら出版業、印刷業、活字鋳造業などに手を出す。銀鋌開発や雑誌経営も試みるが失敗。債権者に追われる中で多くの傑作を残した。1850年没。代表作『ピラエグの女相続人』『ふくろう党』『結婚の生理学』『ウージェニー・グランデ』『ゴリオ爺さん』『谷間のゆり』『老嬢』『幻滅』『従妹ベット』

『従兄ポンス』『現代史の裏面』などなど。彼の主な作品は『人間喜劇』という全集に収められる。(集英社世界文学事典の高山鉄男の解説などを参考にした。)

2 『浮かれ女盛衰記 第四部 ヴォートラン最後の変身』:バルザックは面白い。この集英社文庫ポケットマスターピース03の『バルザック』は野崎歓の編集で、博多かおる訳『ゴリオ爺さん』、野崎歓訳『幻滅 抄』、田中未来訳『浮かれ女盛衰記 第四部 ヴォートラン最後の変身』が入っている。訳は読みやすく、パリの地図や主要人物目録もあり、便利だ。この三作を並べたのは、悪党ヴォートランに焦点を当てたものらしい。

『浮かれ女盛衰記』の原題は "Splendeurs et misères des courtisanes" で、飯島耕一訳では『娼婦の栄光と悲惨』。1837~1847年執筆。第一部~第三部では、黒幕ヴォートランと出会った美しい青年リュシアンが、愛人エステルを使って悪徳銀行家ニュシンゲン男爵(ゴリオ爺さんの下の娘の夫である…)から大金を引き出すが、エステルの貞操観念からの自死を機に、リュシアンも黒幕ヴォートランも逮捕されてしまう。リュシアンは恩人のヴォートランを売ったことを苦に獄中で自死。そこから第四部が始まる。時代設定は1830年頃。

ヴォートラン(暗黒界の総帥ジャック・コラン)は、ここではスペイン人神父カルロス・エレラに変装して登場。愛するリュシアンに死を苦悩し、復讐を誓うが、みずからも獄中にある。ヴォートランが獄内外の手下を使い、また権力者たちを揺さぶりながら、いかに現状から脱出するか、が見せ所の一つ。ヴォートランが使う切り札が、美青年リュシアンに宛てた公爵家令嬢や伯爵家夫人たちの恋文である。これらを公表されると政府要人たちの立場が揺らぐ。検事総長グランヴィル伯爵との直接対決にヴォートランは持ち込む。そして…ここから先はマル秘。『ヴォートラン最後の変身』の意味が、読めば分かる。

同じ文庫に所収の『幻滅 抄』には、美しいが世間知らずで絶望しているリュシアンにヴォートランが出会い、人生と世間の何であるかを吹き込む場面がある。リュシアンはヴォートランの甘言に乗り協力者になり、最後は悲劇的な死を迎えるわけだが…ヴォートランは言う。「…論理なんてものは、政府にだって個人にだってなかった。道徳だってもはやありはしない。…今日、成功のみがあらゆる行為の至上命題なんだ。行為にもはやそれ自体としては何の意味もなく、それを他人がなんとかがすべてなんだ。…外見を立派にせよ！ 人生の裏側を隠し、輝かしいところだけを見せるんだ。…お偉方も貧しい連中に負けず卑劣なことをやるものだ。だが彼らはそれを闇で行い、美德ばかりをひけらかす。だからお偉方でいられるのだ。下層の人間は闇で美德を發揮し、みじめさばかりを人目にさらす。だから軽蔑される。…」 「あなたの社会が崇めてるのは、もう本物の神様ではなくて、黄金の子牛ですよ！」(459~461頁) おや、どこかの国の誰かが言っているようなセリフですね。バルザックはヴォートランの口を借りて、1830年頃のフランスのブルジョア社会の欺瞞を暴き、暗黒社会とどこが違う？と異議申し立てをしているようでもある。それはそのまま現代のどこかの社会への批判にも通用する。同時に、これはあくまでも悪党のヴォートランのセリフであることに注意。あなたもこのままでは悪党と同じ論理になってしまいます。では、どう考えればよろしいのか？ あなたは、どう考えますか？

3 主な登場人物(文庫の人物紹介を参考にした): **ヴォートラン**(ジャック・コラン)(死神だまし)(スペイン人神父カルロス・エレラ):暗黒界の総帥。今は獄中にある。愛する青年リュシアンに死を嘆いている。/**リュシアン**:ヴォートランが愛した青年。ヴォートランを後ろ盾として社交界で活躍。獄中で自死。/**グランヴィル伯爵**:パリの検事総長。/**セリジー伯爵**、**グランリュール公爵**、**モフリニューズ公爵**:パリの名家。その娘や夫人がかつてリュシアンと愛人関係にあり弱みがある。/**カミュゾ**:判事。その妻**アメリ**の上昇志向により出世する。/**デスパール侯爵夫人**:美しく打算的な社交界の花形。リュシアンとグランヴィル伯爵、セリジー伯爵らを憎んでいる。/**ゴー氏**:監獄所長。/**テオドール・カルヴィ**:かつてのヴォートランの手下。コルシカ出身。死刑執行間近。/**ビビ・リュパン**:保安警察署長。もと暗黒界の住人。/**コランタン**:秘密警察。/**テッテ鳥**、**絹の糸**、**牡屠屋**:暗黒界の住人。これらは呼称で、本名は別にある。/**プルダンス**、**パカール**:暗黒界の住人。/**ジャクリヌ・コラン**:ヴォートランの叔母。暗黒界の住人で腕利き。(図書研修課 Y)